

短歌募集

● 課

題

随意

● 切

切

毎月十日

● 賞

賞

三光に呈す

● 選

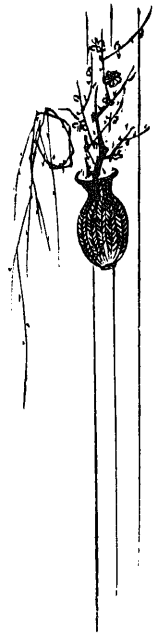
評

本會

● 投

稿

用紙「はがき」にて本會宛



赤坂離宮の菊花を拜觀にまゐりて

後 子

大君のみけしのあやもかもほえて

あやにかしこき雪の上の菊

國の要とて一もとに八百あまりの花の

さけるを見侍りて

末廣くにはへる菊もひとすぢの

大和心やかかなめなるらむ

紅葉のうつくしきかねの苔の上にちりたる
を

おちたるをひろはぬ御代も木のもとに

のこすはをしき紅葉のいろ



短歌

(募集の分)

秋

菅原喜代藏

地 夕鳥波の峙もいつしかに

秋たけぬらん聲の淋しき

旅順港秋月

鹽野 まつ

人 仇ものゝ露にかふ軍艦

散りてくまなき湊江の月



月

鹽野 まつ

ましらなと阿蘇山本の小あせ道

月にぬれつゝ歸る村人

鶯

御社の杉生の中に鶯の

笹啼さむき朝月夜かな

夜長

つはものの軍がたりに長き夜の

更くるも知らぬ埋火のもと

野梅

おとなへば野守はあらで傾きし

藁屋の軒に梅か香そする

三十

淺井眞未

つれなしと世をしかたてゐるわひ人の

姿に似たり露の白きく

とこやみの神代のこともおもほえて

こゑ凄しき夜半の木枯

菅原喜代藏

秋風のさそふまに／＼女郎花

色香ゆかしうちなびくなり

龍田姫しらふる琴かうき秋の

寐莫やぶり鈴虫のなく

天つ日の西になりつゝあらゝぎの

九輪の光稍々に消え行く

草の戸に詩思ひ居ればめの内も

野邊もひとつに鈴虫のなく

紅葉ちる山のふもとに古寺の

木魚さひしく時雨ふるなり

はかれかれ君と語ふ木下道

寂寞そへて狐なくなり

鬼瓦置く霜白くとのばかり

君待ちおれば夜ぞふけにける

こもしろき歌唄ひつゝ山かげに

栗の實捨ふ里の少女子

大君の御言のまゝにしきしまの

屋のひらけぬさとはあらしな

秋のうた 牧 水

秋茄子は武藏少女が草籠に露にははせて町へいでにけり
竈の火はの紅かりきとはくくと歩みよりにし秋の旅籠屋

姉に添ひて茸狩りにしその秋の雲は照るらむ故郷の山

寂寥や船より出づる旅人に松透きて照る脱秋の雲はとくくと誰そや背戸うちそのまゝに去にける如き秋の夜の雨

花がくれそがひて立たむうしろ影さびしさおもふ白芙蓉かな

○ 春 子

秋草に灯はそめて心なくこよひは寝ねむ夢も見ずして

唐紙の雨のにじみもある時は人の顔しぬ病に伏せば

しばらくはこの世の外の時とかもひ君とゆくかな秋草の野邊

しねかしと常はおもへる人とめて語り更かしぬ初秋の宵

砂文字に飽きたる稚子と松の葉を長うつなぎぬ小春日の磯

和 歌 子

○ 銃の音に鹿のなくねはふとやみて尾花をわたる風そ身にしむひき白の音のみもるゝ賤が家の垣にわまれる秋萩の花

山里は垣ねの小萩花ちりて茸とる子の聲きこゆなり

○ 百舌鳥のこゑ昨日かたえし裏の山霞たばしり冬は來にけり

温泉の宿の室毎室ごとに霧吹きてそゝや入り來ぬ山の秋風

山駕籠を杉の木の間によてさせて逆さ富士見るあさの湖

○ 杉のかげくろくうつれる山の井の底にあらめく二つ星かな

鬼追ふてゑよりあけて冬の山鐘よりさきに暮れはてにけり

書あまたひらき散らせる窓の中に歌のやうなる月はさしぎぬ

○ たゝずみて千鳥さくらむかばや誰れ加茂の糸の月の夜を

松風に吹きかゝとされて山の井の底に氷れる有明の月

木枯の一われはてし山里の障子にちさき千柿の影信濃路や蕎麥の雪吹く風に紅葉とく散る更科の里